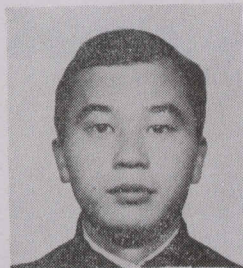


実行委員長挨拶

増田 昭



駿台祭も今年で89回目を迎える。その間真新しい記憶として残る昨年の中止を含め、駿台祭の歴史は、そのまま大学と共に歩んだ学生の姿を表わしているのではないだろうか。戦前、戦後そして60年代と時代は変り、サークルも、その表出されたものもある時は抵抗の詩として、又ある時は充足のフェスティバルとして語られたが、それらはすべて先駆者の喜びの表現であり、挫折の焦躁感、そして怒りの表現であったことに変りはない。

時は70年。大学は相変わらずベニヤ板をはった半ロックアウトの状態であり、昨年6月以降の明大闘争も何んら具体的なメドがたたないまうやむやの過去に置きさられようとしている。そうした中で私たちにもどってきた日常性、それは決して私たちのくもの>ではないし又、大学共同体ということではできない。何よりも私たちと現在の大学とを象徴しているのは高い檻のような鉄格子だから。

大学とは、私は思う、すべての大学人がおのれの主張を自由に表現し又行動する。そうした中から何んらかの重足する部分が6~7割でも見いだされるならば、それは大学としても立派な理念もそこに存在するのではないかと(実際の話これは本当に大変なことなのだが)

何をやろうとしても昨年来ることをできない私たち。限り無く展開する論理、観念の濫乱する中でうずくまってしまった私たち。自己否定、解体でも私たちは生きています。今私たちは、これをもって大学祭をやろうとする。何も無いかもしれない、否無にもなれないかもしれない。でも今ここから出発することも可能ではないだろうか。

学生部長挨拶

大木 芳朗

駿台祭は本年で89回を迎える永い歴史をもっております。駿台祭の歴史は明治大学とともに歩んだ学生の歴史であると同時に学生自治の歴史でもあります。

昨年は大学紛争によって中止のやむなきに至りましたが、本年は六月に駿台祭実行委員会が発足し、第89回駿台祭の準備が委員諸君によって意欲的にすすめられ、今日開催のはこびとなりました。

駿台祭においては、それぞれの各サークルならびに各研究団体が、自治活動の一環としておこなってきた研究活動の成果を展示するとともに、また全学生、父兄、教職員たちがこの行事の期間を対話と接触の中に過すことは真に大きな意義があると思います。

したがって、駿台祭は研究活動をおこなっている一部の学生諸君だけのものではなくて、全学生諸君が、それぞれの立場から積極的に参加することを希望します。

さらに、研究成果の展示については、先輩、父兄、一般の多くの方々の参観をえることを期待します。

全学生諸君にとって有意義な、かつ盛大な駿台祭であることを念願して、私の挨拶とします。